

CONTENTS

文化人の本音 河合隼雄文化庁長官対談 第35回 ゲスト ドナルド・リチーさん●映画史家

日本映画とともに歩んで	4
長官コラム 文化庁の抜穴	9

いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート⑤ 大阪府立弥生文化博物館(大阪府)	22
芸術文化の活動風景 ① 武田陽一(ピアノ調律師)	23
そうかこうすばいいんだ! 著作権教育実践事例 ① ITを活用した授業のための著作権教育	24
文化交流使の活動報告 ① 笑福亭鶴笑(落語家)	25
伝達地区を見守る人々 伝達蔵時記 ① 城下町のおひなさん(岐阜県恵那市岩村町)	26
遺跡を楽しむ ① みんなでつくる「みんなの遺跡公園」	28
文化庁の地域文化振興施策 ① 事例紹介 本物の舞台芸術体験事業	29
国語研究の最先端 ① 新しい日本語学習環境の整備	30
風を呼ぼう、わが町に 登録文化財との歩み ① 「思い出ふれあい事業」の展開 高齢者ケアと文化財の活用	31
文化力ニュース from 関西 関西元氣文化圏の特色ある取組 ① 広がる・つながるミュージアムの輪	32
国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法—文化財鑑賞の手引き—② 仏画(仏教絵画)の線描	33
日本の伝統美と技を守る人々 選定保存技術保存団体編 ⑤ 左官(日本壁)(全国文化財壁技術保存会)	34
心豊かで魅力ある社会を目指した「文化力」の向上 平成17年度文化庁予算の概要	35
平成16年春秋叙勲受章者の決定 「地域文化で日本を元気にしよう!」 文化審議会文化政策部会報告書公表	36
東京国立博物館 特別公開 中宮寺 国宝 菩薩半跏像	39
京都国立博物館 特集陳列 宸翰—文字に込めた想い— 子ども向け講座第三回少女博物館くらぶ ロダンを写そう	40
奈良国立博物館 曙光の時代—ドイツで開催した日本考古展—	41
東京国立近代美術館 工芸館 所蔵品展示 近代工芸の百年	42
京都国立近代美術館 村上華岳展	43
国立西洋美術館 ジョルジュ・ド・ラ・トゥール展—光と闇の世界—	44

特集 日本文化の総合的な発信機能の強化

文化庁提言

今後の国際文化交流の課題 国際文化フォーラムの開催を通じて

有識者提言

文化交流の「包含語法」と「排除語法」

東大寺フォーラム

音楽の国際文化交流について思う

複眼的思考による発信戦略を

事例紹介

文化庁国際文化フォーラム報告

取組紹介

文化庁文化交流使事業について

石原秀樹

李 御寧

山折哲雄

海老澤敏

高階秀爾

国際課

国際課

国際課

国際課

今月の
表紙第2回国際文化フォーラム
討論「文化の多様性」鼎談

新国立劇場スポットライト	45
3月の国立劇場	46
芸術文化振興基金ニュース	47

題字デザイン 桑山弥三郎

今後の国際文化交流の課題

国際文化フォーラムの開催を通じて

国際文化フォーラム

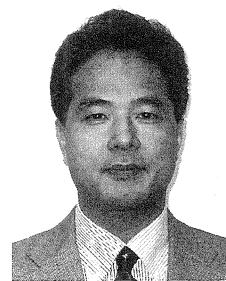
一昨年から、毎年一月、文化庁長官の招きで、文化のさまざまな分野の第一線で活躍する海外の著名な芸術家、文化人が関西に集まり、我が国を代表する芸術家、文化人と活発な意見交換を行うようになりました。世界各地から訪れたその顔ぶれを一部紹介すると、西アジアからは、戦火や、文化財等の略奪の被害の記憶も生々しいイラクの考古・遺産庁長官、イランの法哲学者等、南アジアから、インドの国立近代美術館長、パキスタンの国立芸術大学長、東南アジアから、マレーシアの現代美術館長等、そしてお隣りの韓国から、比較文学の大家、演劇界

の重鎮、デジタル・アートの第一人者、人気アニメーションプロデューサー、漫画家等の、新旧の文化芸術を代表する人々、大洋州から、オーストラリアの国際芸術フェスティバル芸術監督、米国から、ジャズ界の大御所、電子音楽作曲家、名門大規模美術館の館長等、南米から、アルゼンチンの現代音楽作曲家、北アメリカから、エジプトの哲学者、欧州から、各国を代表する名門博物館・美術館や、完成前から展示事業を開始している最新の現代美術館などの館長たち、ドイツの仏教美術専門家、フランスの思想家、英国の中国古代美術研究の権威、オーストラリアのモーツァルト研究の大家などです。ほぼ世界全域から、しかも、文化芸術のあらゆる分野の人々が集まってきている

といつても過言ではありません。

彼らは、近年、世界的にその重要性への認識が高まっている「文化の多様性」という概念を共通テーマとして、比較文化論、美術、音楽、歴史、映像芸術、演劇、アニメ、マンガ、サブカルチャー等、各々の分野の視点から、二一世紀の社会において文化芸術が担うべき役割や、文化に関する対話が政治的対立の緩和や紛争の解決をもたらす糸口となる可能性等について、日本からの参加者とともに論じ合っています。その様子は、詰めかけた多くの人々に傍聴され、さらに、テレビ、新聞等のメディアでも大きく報道されています。

舞台となるのは、古代官寺の本堂、華麗な障壁画に囲まれ、中庭の能舞台を望



長官官房国際課
国際文化交流室長
石原秀樹

む寺院の書院、近世城郭庭園内の茶屋、フランス・ルネサンス様式で建てられた明治の洋館、びわ湖畔の音楽ホール、世界的に活躍する日本人建築家の手になる現代美術館など、古代から現代までの我が国の、海外との交流を通じた文化の発展の諸相を映した会場です。

フォーラムの場として関西を選んだのは、世界各地から訪れる芸術家、文化人に、早くから大陸との交渉によって蓄積された伝統の厚みをもつ関西の文化に浸る機会を提供して、首都東京の経済大国の顔とは別の我が国のたたずまいを知ってもらい、影響力ある彼らの今後の言論・表現活動を媒介に、工業製品を通じて伝わるイメージとは別の日本像が、海外の多くの人々に伝わることを期待してのことです。

国際文化交流の 目的と推進方策

この「国際文化フォーラム」は、文化庁が、国際文化交流の分野で従来以上に重要な役割を果たすための具体的推進方策の支柱をなすものです。平成一三年の

中央省庁再編時に、国際文化交流の分野における文化庁の役割について、中央省庁等改革基本法は、「国際文化交流については、外務省との連携を更に緊密化し、文化庁がより重要な役割を果たすこと（第二十六条第八項）」と定めました。文化庁は、この新たな重要な役割を適切に担うべく、平山郁夫東京芸術大学長を座長とした有識者で構成される「国際文化交流懇談会」を設けて、国際文化交流を総合的、計画的に進める指針をまとめました。それが、平成一五年三月に公表された同懇談会の報告書「今後の国際文化交流の推進について」です。

同報告書は、国際文化交流の目的として、
・文化の相互理解による国際平和、自由な世界の実現
・日本への親しみ、国際社会での存在感の増進
・国内の文化芸術の発展

を掲げ、その目的を達成するための具体的推進方策として、国際文化フォーラムの開催等による総合的な発信機能の強化を挙げています。文化庁はこの方針に従

って、同フォーラムの成功と、年を追うごとに内容の一層の充実に努力を傾注しているところです。

今後の国際文化交流の 課題

文化芸術分野の第一線で活躍する内外の人々が集まるだけに、国際文化フォーラムは、討議の中で、国際文化交流にとつての最も現代的な課題を浮き彫りにする場ともなっています。本稿に続く寄稿の中で、同フォーラムに参加された海外からの講演者や各座談会の座長等が国際文化交流の課題として指摘されていることは、文化発信には、相手側の受け止め方に思いをめぐらせる細心の注意と説明のための不断の努力が不可欠であるという点に集約することができそうです。海外の人々に、利害得失の計算によってではなく、「情」や「心」の領域で、日本のことを知ろうと思ってもらえるような環境を整えていくためには何をすればいいのか、今後とも自問し、また、外部の意見に耳を傾けながら、努力してまいりたいと考えております。

文化交流の「包含語法」と「排除語法」

梨花女子大学校
文理大学碩座教授
李 御寧



アフリカ原住民の改宗に失敗した宣教師の話がある。「私たちはみな罪びとです。私たちはすべては信仰に帰依しなければなりません」と布教したからだ。マレー語のカミとキタのように、第一人称複数には二つの型がある。一つは話し手と聞く人を含む「包含語法」の「私たち」であり、もう一つは聞き手を含まない「排除語法」としての「私たち」である。

宣教師がその部族語で語った「私たち」は、包含語法ではなく、排除語法の第一人称複数であったのだ。その話を聞いた原住民たちは、宣教師とその家族、または白人たちをみな罪びとだと思い、自分たちとはまったく関係がないことだ、と誤解した。

文化交流でもっとも重要なことは、その文化プログラムと目標が相手にとって包含語法か、排除語法かによって、大きく違ってくる点だ。特に国の文化交流の政策には、国家イメージを高めるとか、通商の広報といった一方的排除語の「私たち」の語り物になってい

る場合が多い。

世の中には、一〇〇%純粋な文化交流というのはいない。大きく見れば、自国のインタレストと関係をもっている。しかしインタレストそのものの語源が、「あいだ」(inter)に「あるもの」(esse)という意味だ。文化交流とは言語のように、話し手と聞き手の間で行われているもので、話し手だけの「私たち」は、宣教師の話と同じく、失敗に終わる。

同じ歌舞伎においても、文化交流のプログラムとしては『忠臣蔵』よりは『俊寛』のほうが、包含語法に近い。『忠臣蔵』の武士道、怨念と復讐、腹切りなどは、排除語法で、好奇心と珍しさというローカル・カラーはあるが、深い共感を分け合うことは難しい。近代的な観点では、集団主義、反フェミニズムのおそれがある。

『俊寛』は、個人の実存が生み出す肉体的ドラマで、おそらく世界のどこでも時代と空間を越えた感動を与えるに違いない。と同時に、

されるように、自国の文化を自分自身の手で、異国情緒を誘う観光物に歪曲することが頻繁に起こっているからだ。

文化相対主義も、文化普遍主義も、文化交流の面ではきれいに分けることはできない。普遍性と特殊性をいかに乗り越え、語り手と受け手が一緒に楽しみ共感し、お互いの理解を深めるかが大事だ。

伝統物であれ、現代物であれ、ポケモンとか「冬ソナ」のブームのように、文化交流においても自然発生的なマーケットから生まれてくるのが、望ましいことだ。だから国は、ただ舞台だけを設けるのはいい。なるべく政治、経済の伏線を設置しないほうが、かえって国利になることが多い。だから舞台上に上るときにも、黒子姿がいい。そのテーマについても、なるべくイデオロギーから抜け出ることだ。韓国のサムルノリが、世界的に訴求力をもった文化交流の数多い業績を生んできたのは、言葉とかメロディーよりは、リズムを基にした打楽器のパフォーマンスであったからだと思う。

文化の力は、官僚主義からは生まれてこない。文化を発信・受信する集団は、ファン・クラブのように、個人個人が集まった自己組織化(オート・ポエシス)に限る。

単純な例を挙げたが、どこでなにをしても、すべての文化交流の政策と実践の鍵は、第一人称の複数をいかに排除語法から包含語法に

日本で見られない劇的様式とか日常生活の情報も与えてくれる。

まったくこれと同一なことが、韓国の文化交流でも起こっている。朝鮮朝時代の有名な伝統劇パンソリ『春香伝』を欧米で公演すると、意外なカルチャー・ショックを起こす場合が多い。「十枝歌」は、刑吏が数を唱えてコンジャン(棍杖)を打ち、チュンヒャン(春香)はその数になぞって歌をうたうという、もともとも人気のある場面だ。ところが、欧米の観客には、女を板の上に縛って、苛酷行為をするサディストの拷問シーンとして、映るだけだ。女を焼き殺す魔女狩りよりも拷問のほうが、もっと残忍に見えるのだ。

女の操をテーマにした劇だが、婚前の娘の恋仲を母親が公然と手伝っているラブ・シーンも、道徳的衝撃を与える。キーセン文化の特殊性を知らないからだ。

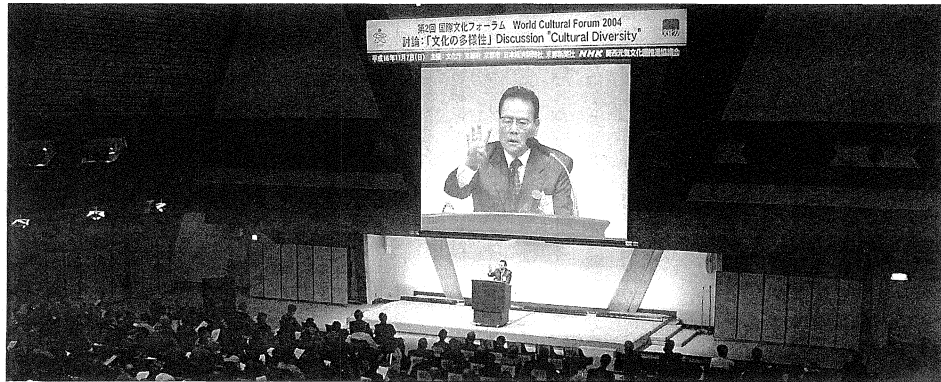
もちろん受け手中心の文化交流も、交流とはいえない。西洋のオリエンタリズムが非難



パンソリ

換えるのかにある。その具体的な様式としては、いま試験段階ではあるが、日本の「文楽」と韓国の「パンソリ」を一緒に組むクロス・オーバーの文化プログラムなどがある。Fusionをfuture visionと解いている未来学者もあるから、ただの夢事とはいえない。映画もTVDドラマも、日韓合作はどうか。いやすでに韓国では、日本のアニメを映画に作ったものが現れている。

今年「韓日友情の年」だ。だがワールド・カップ共催のときと同じく、「韓日」か「日韓」かで、両国の表記は異なっている。東アジアの「私たち」は、謙譲の文化を二〇〇〇年以降に分けてきた。韓国では「日韓」といい、日本では「韓日」というのが、本当の友情の年ではないのか。



国際文化フォーラムでの講演

有識者提言

東大寺フォーラム

常識とされる考え方があった。

日本文化には、もともと発信機能などない、あつたとしても微弱なものだ。しかし受信機能ということになれば、日本文化には燦然たる歴史と伝統がある、と。

この常識に、私は半ば賛成する。いや、同意せざるをえない。それこそ我々の歴史と伝統が、そのことを証明しているからだ。

とはいえむしろ今日の我々は、この常識の前にただ腕をこまねいて膝を屈しているわけにはいかない。これからはその日本文化を、何としてでも世界に発信していかなければならない。そういう時代の中に投げだされているからである。そのために新たな戦略を立て、現実的な戦術を練り直さなければならぬ段階にきているからだ。

今日、海のかなたからいつでも聞こえてくるのがグローバル化の合唱である。西欧発信の普遍主義の声、声である。その合唱と声に抗して、我々の発信機能をどのように再

構築したらよいのか。外来の普遍主義という

尺度に対して、我々自身の黄金の尺度をどのように持ち出すのか。それにさしあたり三つぐらいの方法があるだろうと私は考えている。

一、情理かねそなえる認知的スタンス

二、文武両道にわたる伝統モデル

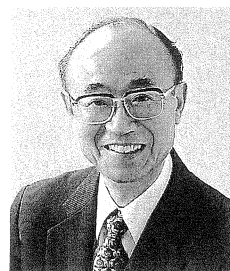
三、神仏共生システムにもとづく多元主義である。

第一の「情理かねそなえる」とは、理性に人情の血をかよわせるといふ認知の戦略である。理性のディベートや理屈に終始するバトルは、せいぜい相手の頭か胸のあたりにしかとどかない。「理」を相手の腹の底に打ち込むためには、浸透力のある「情」の作用をはたかせなければならぬ。今日、その情理が噛み合わないようなグローバル化の論議があまりにも多すぎるのである。

第二の「文武両道にわたる伝統モデル」とは何か。我が国には古来、公家的なものによって武家的なものをコントロールする非暴力

国際日本文化研究センター
所長

山折哲雄



的な技術の伝統が豊富にあった。身に寸鉄を帯びずして武力の発動を鎮める装置である。平安時代三五〇年、江戸時代二五〇年の、長期にわたる「平和（パクス）」は、その巧みな技術（人心掌握）によってはじめて可能になったことを思いおこす必要があるのではないか。

第三の「神仏共生システムにもとづく多元主義」。我が国においては土着の神道と外来文化としての仏教が、いわば共棲する形でみごとな同伴関係を結んできた歴史がある。それが文明や文化を受容するときの基本パターンとなつて、我々の社会の形成に大きな影響を与えてきた。これこそまさに、一宗教にもとづく一元的な合理信仰や一面的な市場信仰を相対化するための絶好の思想武器ではないか。これをこれからは世界にむかつて積極的に発信していかなければならぬだろう。

昨秋、東大寺で行われた文化庁主催の国際文化フォーラムは、そうした問題を考えるためのとてもよい機会であつたと思う。

有識者提言

音楽の国際文化交流について思う

昨年の文化庁主催第二回国際文化フォーラム「文化の多様性」の一環として座談会「音楽における二つの維新」の座長をつとめた私にとって、お二人の外国人パネラーから異口同音に発せられた言葉には、いささか戸惑いを感じながらも、反面、同感の思いもまた禁じ得なかった。

それは、こと音楽については国際交流はいつもえてして一方通行であつたとの指摘だつた。歴史的に見ても中国の宮廷音楽、大陸からの仏教音楽のいずれにしても、移入後の変容はあるものの、一方的な移入、消化であつたし、明治維新後の西洋音楽の導入についても同様の経緯に始まり、今なおその傾向は続いているとも語れるのだ。

二一世紀の初頭の現時点でも、音楽文化の国際交流の動向は圧倒的に入超の状況が続いている。現今、いわゆる洋楽の世界で、演奏

家、とりわけ指揮者やソリストの海外での活躍の機運が醸成されてきていることも否定しえない一方、我が国の伝統音楽や伝統芸能がしだいに国外に紹介され、関心や注目を集めつつあるのも事実であらう。

ただ、そうした国際間交流の努力も、多くはアーティストの個人的な努力や民間のボランティア活動に支えられてのものである点も強調せざるをえない事実なのだ。オーケストラのような音楽団体や組織でさえ同断で、文化庁や日本芸術文化振興会からの助成金といったサポートがあるにしても、また企業やその財団からの支援を仰ぐにしても、自腹を切つての渡航費調達が常識であらう。海外演奏旅行が外国のマネージャーのギャラや顎足つきの招へい、つまりビジネスとして成り立つなど、今でも夢物語に近いのが現実なのである。

作曲家の創作活動もまたしかりであらう。私

新国立劇場運営財団
副理事長

海老澤敏



は座談会で、まだおよそ一〇年ほど前の一つのエピソードを紹介したが、それはさる高名なドイツの指揮者さん、日本の作曲界にはほとんど通じておらず、武満徹の名しか知らないであつた。私は他の実力ある日本人作曲家を紹介申し上げたのだったが、これは私には、優れた日本人作曲家たちも、意欲的に海外の楽壇に対し積極的な自己紹介、あるいは自己宣伝の努力をつくしていないか、あるいは日本的美徳（？）の中に安住しているかの事例に思えてならないのである。

グローバル化が声高に叫ばれている今、民間の国際文化交流活動も、音楽の世界ですます盛んに試みられているのを知ること、プロフェッショナルな音楽家諸氏も、日本の多様な音楽文化を、個性的な活動をとおして、国際的な規模で広めていく努力を傾けてほしいものである。

複眼的思考による 発信戦略を

大原美術館長
高階秀爾



先ごろ開催された国際文化フォーラムでの座談会の席上、「無智の衝突」ということが話題になった。「グローバルゼーション」という言い方に端的に示されているように、地球上のさまざまな国、多様な人々のあいだの接触や交流が盛んになると、異なった文化に対する「無智」にもとづく摩擦や紛争が多発する可能性が増大するという話である。いや可能性だけではなく、現に異文化への無理解による不幸な事件がいくつも起きている。タリバンによるバミヤンの石仏破壊など、その例の一つと言ってよいだろう。

文化の違いはいたるところで見られる。ごく卑近な例を挙げるなら、挨拶の仕方一つを考えてみてもそうである。人と出会ったとき、日本人ならまずお辞儀をするが、西欧社会では握手をする。いずれも相手に対する敬意を表わす儀礼の形式だが、そのことを知らなければ誤解のもととなりかねない。こちらはせっかく丁寧にお辞儀をしているのに、立ったま

いきなり手を差し出してくるのは失礼だということになるだろう。しかし西洋人の方にしてみれば、握手に応じないというのは礼儀知らずだと思いかもしれない。そのような誤解を避けるためには、お辞儀のもつ意味を説明しなければならぬ。挨拶のようなごく単純なことでも、さき説明が必要とするなら、より高度な、複雑な内容をもった文化的所産を紹介するにあたっては、その背景や意味を説明することはどうしても欠かせない。

日本人はその長い歴史において、中国や西洋の優れた文化を取り入れるのに卓越した能力を発揮してきた。だがその受容能力の大きさに比べて、日本の文化を他国に知らせるという点に関しては、これまで必ずしも十分であったとは言えない。地球化時代の今日、日本の国際的な発信力の強化が強く求められるゆえである。

その意味で、近年日本の文化を積極的に海外に紹介しようという動きが見られることは、

きわめて喜ばしい。ただその場合、歴史的文化的背景を十分に説明することが不可欠の前提となるであろう。優れたものなら、何も言わなくてもそのまま受け入れられるということがないわけではないが、そのような人気はしばしば単なる物珍しさか異国趣味の段階にとどまってしまうことが多い。本質的なことは、やはり言葉による説明がどうしても必要なのである。しかもその説明は、相手によく通じるかたちのものでなければならない。同じ説明と言っても、文化が違えば発想も論理の展開も違う。自分だけの論理によらず、相手に理解しやすいやり方で説明する必要があるであろう。ということとは、他国の文化のこともよく知っていなければならないということである。

「文明の衝突」と言われるものが、多くの場合「無智の衝突」にはかならない今日の状況では、国際的発信にあたって、自己を知り相手も知るという複眼的視点による戦略が要請されるのである。

事例紹介

文化庁国際文化フォーラム報告

長官官房国際課

文化庁主催の国際文化フォーラムが昨年引き続き「文化の多様性」を共通テーマに開催されました。このフォーラムは「関西元気文化圏」の中心事業として、内外の著名な文化人・芸術家が世界の文化の最新情報や文化をとりまく課題に関する知見を、講演・討論を通じて交換する場を提供するとともに、日本の文化発信の「顔」となる催しとして開催するものです。

本年度のフォーラムは八つのセッションと参加行事が、関係機関の協力を得て、関西が誇る歴史的建造物や現代建築を会場に開催され、刺激に富んだ議論が交わされました。

一月七日には、秋篠宮同妃両殿下のご臨席を仰ぎ、国立京都国際会館において開会レセプションが盛大に行われました。

小泉文部科学大臣政務官は主催者代表あいさつの中で、日本が多様な外国文化を受容しつつ、独自の文化様式を形成してきたことを例にあげ、国際文化交流を通じて国際貢献を行うことを強調したほか、海外からのパネリス

主催行事名

対談「映画と映画祭－これまでとこれから」H16.10.26、オリベホール（東京）
山田洋次（映画監督）／イ・チャンドン（韓国：映画監督、前文化観光部長官）
司会：寺脇研（文化庁文化部長）

討論「文化の多様性」H16.11.7、国立京都国際会館
記念講演：ジャック・アタリ（仏：作家）／イ・オリョン（韓国：梨花女子大学校文理学部教授）
鼎談：河合肇雄（文化庁長官）／山崎正和（劇作家・東亜大学長）／津田和明（日本芸術文化振興会理事長）

座談会Ⅰ「シルクロードと仏教文化」H16.11.8、東大寺
平山郁夫（東京芸術大学長）／山折哲雄（国際日本文化研究センター所長）／ムニール・ブシュナキ（アルジェリア：ユネスコ文化担当事務局長補）／アブドゥル・アズィーズ・ハミード（イラク共和国 考古・遺産庁長官）／ハサン・ハナーフィー（エジプト：カイロ大学文学部哲学科教授）／モスタファ・モハググダーマード（イラン：シャヒード・ベヘシュティール大学教授）／森孝一（同志社大学神学部部長）／ジェシカ・ローソン（英：オックスフォード大学マートン・コレッジ学長）／田辺勝美（中央大学総合政策学部教授）

座談会Ⅱ「音楽における二つの維新」H16.11.12、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール
座談会：海老澤敏（財）新国立劇場運営財団副理事長）／オットー・ビーバ（オーストリア：ウィーン楽友協会資料館長）／小島美子（国立歴史民俗博物館名誉教授）／ヨーゼフ・クライナー（ドイツ：ボン大学日本文化研究所所長）／渡辺裕（東京大学大学院人文社会科学系研究科教授）デモンストレーション：林美智子（オペラ歌手）／国本武春（浪曲家、シンガーソングライター）

座談会Ⅲ「日韓学生サミットin大阪」H16.11.14、国立国際美術館（大阪）
平田オリザ（劇作家）／大平光代（大阪市助役） 他 日韓の高校生・大学生13名
※詳細は1月号に掲載

座談会Ⅳ「日韓若手芸術家・文化人会合」H16.11.15、NHK大阪放送局
宮台真司（東京都立大学助教授）／キム・ヒュジョン（韓国：秋溪芸術大学校文化産業大学院院長） 他
※詳細は1月号に掲載

対談「日韓文化交流の未来」H16.11.17、メガボックス（ソウル）
河合肇雄（文化庁長官）／イ・チャンドン（韓国：映画監督） 司会：寺脇研（文化庁文化部長）

座談会Ⅴ「文化の多様性への対応－21世紀の美術館の課題－（その2）～国際化時代における美術館の在り方～」H16.11.23、兵庫県立美術館
高階秀爾（大原美術館長）／ザイノル・アビディン・B・A・シャリフ（マレーシア：ギャラリ－・ペトロナス館長）／パオロ・コロポ（イタリア：国立21世紀美術館長）／アン・ダノンコート（米：フィラデルフィア美術館長）／ヴェンツェル・ヤコブ（ドイツ連邦共和国美術展示ホール館長）／木村重信（兵庫県立美術館長）／ジェラルド・レニエ（仏：国立ピカソ美術館長）



座談会Ⅰ「シルクロードと仏教文化」

クロードと仏教文化」と題した座談会が開かれました。

座談会では、冒頭、平山学長が「日本で仏教文化が形づくられるにあたっては、シルクロード周辺諸国のさまざまな国々、民族の恩恵を受けた。イラク情勢は混乱しているが、人道、経済支援にプラスして文化面でも復興支援したい」と挨拶。プシュナキ氏が、「異なる文明の対話は難しくもあるが、すべての文明を尊重すべきだ」と述べました。

そのほか、シルクロードを介した文化交流や、イスラムと西洋の対話の必要性や、イラクの文化的な援助など、シルクロードを取り巻くさまざまな文化の課題について、活発な



討論「文化の多様性」

トを代表して李御寧（イ・オリョン）氏が、日韓と西洋の文化や習慣の違いを例にとりながら、文化の理解の必要性について述べました。

秋篠宮殿下は、殿下ご自身の外国訪問の経験を元に、それぞれの文化の共通点や相違点の理解の重要性について述べられ、このフォーラムの成果に期待を寄せられました。

討論

「文化の多様性」

現在の国際情勢において、「文化の多様性」という概念がもつ意義を、内外の知識人が語り、話し合う討論「文化の多様性」が、秋篠宮同妃両殿下のご臨席を賜り開催されました。はじめに、ジャック・アタリ元フランス大統領

領特別顧問と李御寧（イ・オリョン）元韓国文化大臣による記念講演が行われました。アタリ氏は「グローバル化と文化の多様性」と題した講演の中で、「グローバル化が進むにつれ、文化は変容への圧力にさらされる。固有の文化を守る努力も大切だが、他文化を受け入れる柔軟さもあわせもたなければならぬ」と文化の多様性維持の条件について述べました。

また、李御寧氏は「虹の色は何色か——東アジア文化の同質性の崩壊と多様性を考える」と題して講演を行い、虹を七色と数える以外に、二色や五色、六色で識別する文化もあることを紹介し、是か非かの二項対立で物事をとらえる西洋の思考法で見れば、多様な文化の存在は、それ自身が紛争の火ダネになりかねないと指摘。これにひきかえ、グー・チョキ・パリーの三者が互いに優劣を分け合う「 ज्याঁけん」の意義を強調。大陸（中国）、半島（韓国）、島（日本）になぞらえて「互いの主張を尊重しつつ共存し合ってきた東アジアの柔軟な知恵に、新しいパラダイム（枠組み）を生む可能性がありそうだ」と述べました。

続いて、津田理事長、山崎学長、河合長官による鼎談があり、その中で山崎氏が文化と文明の違いを、「文明は人類に普遍的なもので一つに収束していく。一方で、文化は多様さをもつ」と豊富な具体例を挙げて鮮やかに弁

議論がなされました。

最後に、司会を務めた山折所長が、「我々日本人として伝統的な宗教の在り方を日本から発信し、キリスト教、イスラム教をはじめさまざまな宗教間の対話を進めていく必要がある」と発言し、森本東大寺別当は「お互いが知り合い、相互補完的に生きていくことが大切であり、今回のシルクロードの遺産をきっかけとして集まった本座談会をシルクロードの終着点である東大寺で実施できたことは非常に有意義であった」とまとめました。

座談会Ⅱ

「音楽における二つの維新」

明治維新時の洋楽の導入と、現在の国際化や情報化維新によってあらゆる種類の音楽の流入状態という、我が国の明治と平成の音楽状況を対比させて、その違いと共通性について論じる座談会が、秋篠宮妃殿下のご臨席を仰ぎ開催されました。

座談会では、小島名誉教授は「明治期の日本では音楽イコール西洋音楽という考え方が支配したため、当初は伝統音楽の存在が無視されたが、大正時代から徐々に伝統を生かした日本人独自の表現方法を模索し始めた」と解説。オットー館長は「明治期に西洋は日本の音楽に多大な影響を与えたが、日本の音楽が西洋に影響を与えなかったのはなぜか」と疑

別しました。一方、津田氏は現代の人々が歌舞伎や音楽に興味をもつことができるように国立劇場や音楽劇場で行われている取組や、川柳や相撲がさまざまな変遷を経て現代に息づいている事例を紹介しながら、「古い伝統を残しながら新しい智慧を取り込むことで、伝統が続いていく。それにより日本の文化の多様性を保つことにつながるのではないか」と発言。河合長官は「医学の進歩で多くの命が救われるようになった一方で、人知の限りを尽くしても直せない病気が増えている。これは近代化という科学万能主義に対する、人間の生物としての精いっぱい抵抗の表れではないか」と問題提起。あわせて理想だけでは片づけられない人間の深淵な部分への目配りを促しました。

座談会Ⅰ

「シルクロードと仏教文化」

ギリシャ、ローマの文化が、シルクロードをたどってインド、東アジアに伝播する過程で遂げた変遷を振り返り、その伝播の域内で育まれたギリシャ、日本などの多神教文化とユダヤ、キリスト、イスラムの一神教文化の相互関係を論じるとともに、イラク、アフガニスタンでの多民族共存の歴史、日本における神仏混淆などの事例を採り上げて、文化の多様性の中での人類の共生の在り方を考える「シル

問を呈し、渡辺教授は「日本は明治期に西洋音楽を受け入れたが、それは日本文化の延長線上で受け入れたに過ぎない」と主張しました。クライナー所長は、「文化は地域ごとに多様であり、お互い影響し合いながら変容する」としたうえで、沖縄の歌手やリズムが、現代の日本のポップスに与えた影響などをひもときました。

座談会はこちらしたパネリストの見方を軸に展開しましたが、日本における音楽の維新が、明治期と現在の二回に限られたものではなく、六・七世紀の唐楽、高麗楽などの流入や一六世紀に琉球から伝わった三味線の影響など節目ごとに起きたという見方では一致しました。

また、座談会に先駆けて、オペラ歌手の林美智子さんの独唱と、文化庁文化交流使で浪曲師の国本武春氏の三味線演奏等が行われました。

座談会Ⅴ

「文化の多様性への対応——21世紀の美術館の課題——（その2）国際化時代における美術館の在り方——」

国際化が進展する現代において、美術館と現代美術の活動はパブリックアートやコミュニケーション活動など従来の枠を越えた活動を行っています。こうした活動と社会との関係、国

取組紹介

文化庁は、平成15年度から、日本文化の海外への発信力の強化などを図るため、各々の分野で活躍している第一線の文化人、芸術家などを海外へ派遣する「文化交流使事業」を開始しました。平成16年度の文化交流使は下記のとおりです。

現地滞在型

氏名（プロフィール）	活動国
高岡美知子（答礼人形研究家）	アメリカ
松本直み（舞台照明家）	フィリピン
ラッシュ・ヴァリエ（詩人）	スウェーデン
ローチャン由理子（画家）	インド

海外派遣型

氏名（プロフィール）	派遣国
国本武春（浪曲師）	アメリカ
小宮孝泰（俳優）	イギリス
三谷温（ピアニスト）	クロアチア
平野啓一郎（作家）	フランス
四方田犬彦（映画評論家）	イスラエル、セルビア・モンテネグロ
笑福亭鶴笑（落語家）	イギリス
井上廣子（造形作家）	オーストリア
北村昭斎（漆芸工）	ドイツ
杉本洋（日本画家）	カナダ
橋口譲二（写真家）	ドイツ
宮田まゆみ（笙演奏家）	ギリシャ、イタリア、フランス、ドイツ、ルクセンブルク

来日芸術家型

氏名	専門
イシュトヴァーン・コロッシュ	パイプオルガン
エムバイヤ・プラス（団体）	金管五重奏
フランソワ・ルルー	オーボエ
カール・ライスター	クラリネット

公開フォーラム～日本を世界に伝える～

第2回文化庁文化交流使活動報告会の開催について

文化庁では、今年度文化庁文化交流使として海外で活動していただいた方々による報告会を下記の通り開催します。（入場無料）

日時：平成17年3月31日（木）14:00～17:00

場所：サントリーホール 小ホール

文化交流使参加予定者：北村昭斎、国本武春、小宮孝泰、杉本洋、平野啓一郎、三谷温、宮田まゆみ、四方田犬彦（50音順、敬称略）

プログラム：○開会挨拶：河合隼雄（文化庁長官）

○デモンストレーション：国本武春、宮田まゆみ、三谷温

○文化交流使による報告・パネルディスカッション

参加の申込方法：FAXまたは往復はがきに住所、氏名、性別、連絡先（電話、FAX、E-mail等）、職業を記入の上、下記連絡先までお申してください。3月14日（月）締切ですが、申込先着順のため、定員になり次第締め切らせていただきます。

連絡先：文化交流使公開フォーラム事務局

電話：03-5511-1514 FAX：03-5511-1505

E-mail：bunkakoryu05@ccc-inc.co.jp

〒105-0004 港区新橋2-13-8 新橋東和ビル3F

文化庁文化交流使事業について

長官官房国際課



座談会V「文化の多様性の対応—21世紀の美術館の課題—」

際的なつながりや多様性の問題などについて、各参加者が、各国の事情も紹介し、国際化時代における美術館や現代美術の在り方を探る座談会が開催されました。

はじめに、ヤコブ館長が、「無知の衝突を回避すること」を美術館の課題の最重要項目に挙げ、異文化相互理解のきっかけづくりに貢献できることを紹介しました。

アビデザイン館長は、元植民地で経済市場主義が幅を利かせる多民族国家での美術館運営の難しさに言及。コロンボ館長は、現在建設が進んでいる国立21世紀美術館の完成予想CGを使い解説、「斬新な設計で曲線を生かした回廊を歩くうちに（古代ローマの遺跡が集積する）フォロ・ロマーノ」を散策するよう

うな刺激を体験できる」と述べました。

ダノンコート館長は、経済活性化や市街地再開発など、美術館が地域社会に果たす貢献例を挙げた上で、教育面の大切さを強調。欠席したレニエ館長は「現代美術では破壊的・衝撃的な作品が増えてきた。アーティストの作品を一般に橋渡しする役目の美術館としては、来館者の理解を得にくく、両者の板挟みに苦しむことになりそうだ」とのメッセージを寄せ、これからの美術館運営の難しさを示唆しました。

木村館長は兵庫県立美術館の運営方針「文化相対主義」を説明し、最後に、高階館長が「幼いころの美術館体験はその後の人生を豊かにする。子どもにそんな機会を、また人々に多様性を理解し合う機会を提供する場として、これからの美術館の重要性はますます高まるだろう」と締めくくりました。

対談

「映画と映画祭—これまでとこれから」

河合文化庁長官と前韓国文化観光部長官で、映画監督の李滄東（イ・チャンドン）監督が、「日韓文化交流の未来」について対談。

まず、互いが互いの土地に渡ることの重要性や、文化を通じた癒しで日韓両国がより元気になることができる旨が語られました。

李監督からは、「韓流ブーム」は日韓両国の間で文化交流が進む契機であるとの期待が表明され、山田監督は、自国（日本）の伝統と文化を理解することで、はじめて韓国の文化の理解が進むと語りました。

画祭に何を望むか等について対談を行いました。

対談

「日韓文化交流の未来」



対談「映画と映画祭—これまでとこれから」

◆長官対談◆

「文化人の本音」 河合雄雄文化庁長官対談
中川志郎 (財)日本博物館協会
「長官コラム文化庁の抜く」

◆特集◆

史跡等の保存と活用

【施策紹介】

史跡等の整備・保存と活用のために

【事例紹介】

甕の神々のみち・熊野古道伊勢路

普及活用事業

庭園ボランティアの育成

天然記念物の保護が地域を興す

◆文化庁ニュース◆

文化庁企画「お雛煮」〇〇選

平成一六年度 (第八回)

文化庁メディア芸術祭賞の決定 ほか

◆連載◆

「いきいきミュージアム」美術館・博物館事業レポート

高松市歴史資料館

「芸術文化の活動風景」

脈の制作風景

「そうかこうすればいいんだ」著作権教育実践事例

著作権を大切にする社会を目指して

「文化交流使の活動報告」

画家・ローチヤン由理子

「伝建地区を見守る人々」伝建歳時記

高山 登 岐阜県

「遺跡を楽しむ」

戦争を語りつぐ遺跡「南風原陸軍病院壕群」

「文化庁の地域文化振興施策」

平成一七年度の地域文化振興施策

「国語研究の最先端」

「外来語」言い換え提案

「風を呼ぼう、わが町に」登録文化財との歩み

首都東京からの文化の発信 出合い・交流・文化財

「文化力」ニュース〇〇関西 関西元文化園の取組

第一回京都のさくら市民の集い

「国宝・重要文化財をもつと楽しむ方法」

さまざまな資料をつぎあわせて

「日本の伝統美と技を守る人々」

歌舞伎大道具 霞景画 製作 歌舞伎大道具 霞景画 製作技術保存会

文化庁月報 2月号 (通巻437)

平成17年2月25日印刷・発行

編集——文化庁

〒100-8959 東京都千代田区丸の内2-5-1

発行——株式会社 ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 編集 03 (3571) 2126

販売 03 (5349) 6666

URL : http://www.gyosei.co.jp

印刷所—ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円 [本体514円] 送料76円

年間購読料6,480円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

(株) ぎょうせい営業部広告課

電話03 (5349) 6657 (ダイヤルイン)

©2005 Printed in Japan ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。

編集後記

「文化の多様性」は、現在、ユネスコにおいても文化多様性条約の策定の議論がなされているほか、さまざまな国際会議でテーマとなっている、非常に重要な問題であると考えています。

イラク、アフガニスタンの紛争や、二〇〇一年九月一日の同時多発テロなど、民族、宗教などの違いを背景にもつ対立が激化している現在において、文化の相互理解、対話が大きな意味をもつでしょう。

今年の「国際文化フォーラム」では、イラクの文化人をはじめ、世界各国から、さまざまなジャンルの文化人・芸術家に参加いただき、活発な議論がなされました。今回の特集では、座談会の座長、司会をお願いした先生方に寄稿をいただいたほか、「国際文化フォーラム」の議論の内容を紹介しました。

今後、世界の各地で、文化の相互理解が進み、人々の生活が豊かで平和なものとなることを願っています。 (際)

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、文化庁月報の感想などを、ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●

http://www.bunka.go.jp